

# 村落の広場・都市の広場

—和泉地方の事例を中心として—

市川 秀之

- はじめに
- 二 調査の概要
- 三 単独村落の広場
- 四 複数村落の広場
- 五 都市の広場
- まとめ

## 論文要旨

わが国の村落・都市の広場に関する研究はこれまで皆無であり、また広場の存在そのものも注意されることは少なかった。しかしながら村落部においては小面積ではあるが恒常的な広場が存在し、共同体の運営にとって重要な機能を担っている。また都市においても小規模な共同体の保有する会所のよ様な広場と、不特定多数の人々があつまる広場の二種類の広場が存在している。本稿ではこの村落・都市にみられる共同体的な広場と、都市において主にみられる都会的な広場との相関について考察するため、大阪府南部の和泉地域の事例について検討を加えた。当該地域においては、平野部、山間部にみられる農山村あるいは海岸部の純漁村において、典型的な共同体的広場がみられる。これらの村落の集落形態はいずれも集村であり、明瞭な村落境界をもち、非常に求心的な空間構成を示している。その中心にあたるのが広場

である。またこの地域は複数村落によつて祭祀されるいわゆる郷宮座の発達した地域であるが、郷宮座の祭祀における御旅所が広場として重要な機能を担っている。御旅所の空間は日常的には単なる空き地であるが、祭祀時には多くの人が参集し賑わいを示す。このような複数村落における祭祀の場に都会的広場、あるいは都市そのものの始原的な姿を感じることができるともいえる。また都市の広場の代表として堺の宿院を取り上げた。宿院は元來住吉神社の御旅所であるが、時代の推移にしたがつてその性格を大きく変化させている。古代には浜辺での禊神事が行なわれる清浄な空間であったのが、いつしか祭祀そのものが祝祭的なものへと変化していった。御旅所における祭祀が、その空間の集客的な性格を生み出し、ついには恒常的な盛り場としての性格を持つに至った。そこに都市祭礼と広場との典型的な関係を見ることができよう。

## はじめに

「広場」は日本文化の研究者にとって馴染みの薄い言葉である。これまでわが国の都市や村落の広場に対する関心はほとんどなく、それをめぐつての議論もまた皆無であった。しかし人が集まって生活する以上、集合する空間としての広場が必要とされるのはむしろ当然のことであり、このことは日本の都市、村落においてもけつして例外ではないと考えられる。小論では、民俗学的な視点から村落の広場と都市の広場を対比させながら、わが国の広場の特性を明らかにすることにつとめたい。フィールドとしては大阪府南部、旧国名でいう和泉国を取り上げることとする。広場の検討に入る前に、「都市」を中心とする概念の整理をしておきたい。今回の共同研究のテーマは「都市における交流空間」であったが、「都市」のとらえ方についてはさまざまな立場の相違がある。ここで都市の定義を議論する余裕はないが、しかしながら都市を、「多くの人が居住する空間」としてみるか、あるいは「多くの人が集まる空間」としてみるかによって大きく立場が異なってくることは明らかであろう。都市の広場を論ずるときにもこの二つの立場は厳しく区別して考える必要がある。人が居住する空間を示す言葉として「集落」がある。集落は地理的な概念であるが、都市、村落を包括しうる用語としてこれを用いることが可能である。規模の大きい集落、すなわち多くの人が住む集落を都市と呼び、そうでないものを村落と呼ぶことには一定の共通理解がある

ように思われる。これに対して人が集まる空間を指す適当な用語はみあたらない。「かいわい」「盛り場」などはいずれも多集空間の性格の一部を指す言葉だろう。<sup>(1)</sup>そこで小論では、やや日常的な用法とのずれは承知しながらも「都会」を人が多く集まる空間を指す用語として使用したいと思う。そして都市とは多くの人が集まり、また多くの人が住むという意味で都会の低位概念であり、また同時に集落の低位概念でもあると考えておきたい。このように考えると、当然のことながら都市の一般的な範囲からもれおちる部分が生じる。たとえば行政的な意味での都市は、人口規模による規定で定められているが、東京、大阪といった大都市周辺のいわゆるベッドタウンなどは人が多く住む空間ではあっても、人を多く集めるという性格はもっていない。このベッドタウンなどは小論という都市概念からははずさざるをえないだろう。以上の関係を図示すると第 1 図のようになる。A は人が住む空間のなかで求心性をもたないもの、つまり村落や都市近郊のベッドタウンを示している。C は人が多く居住し、かつ人が多く集まる空間すなわち本論でいう都市である。また注意すべきものに B の領域がある。これは人が多く集まるが、そこに住む人が少ない空間を示している。現在は大都市の中心部においては住民が減少し、小中学校等の統廃合が話題となっているが、このような場所はビジネス街や繁華街として人の往来が絶えず、ある意味でもっとも都会的な空間ということが出来る。このように人は住まない人が多く集まる空間は都市の象徴ともいうべき部分であり、また歴史的にも都市の始原的な姿を示す可能性のある重要な部分である。本論ではこのような

都市にかかわる概念の図式を常に念頭に置きながら広場論を進めていきたい。

以上のように都市―都会に関する概念を整理した上で、これらと広場との関係について考えてみたい。文頭にも述べたようにこれまでわが国の広場について議論されることはまれであった。そのような中で、戦後いくつかの広場に関するまとまった研究が出されてきた。一九七一年に出された建築家伊藤ていじ氏を中心とするグループの研究は「日本の広場は広場化することによって存在してきた」という前提のもとに原始

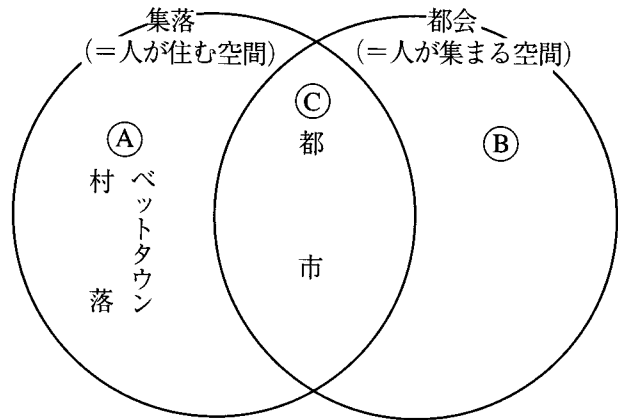


図1 集落・都会・都市

から現在におけるさまざまな広場を取り上げ、特にその広場化の要因をさぐる試みを示している。伊藤氏らの研究には過去の広場を今後の広場作りに応用しようという視点が明確にみられる。造園学の立場から渡辺達三氏は一九七〇年代につきつきと広場に関する論文を著し、わが国の広場の歴史を通史的に明らかにしている。<sup>(3)</sup> これらの研究が建築学や造園学といった立場から七〇年代の初めに示されていることの背景には、戦後の住宅計画、都市計画が実際の機能のみを重視し、人間間のふれあいを見無視してきたという反省があるのだろう。近年では建築学の立場から三浦金作氏<sup>(4)</sup>や加藤晃規氏<sup>(5)</sup>の研究があり、また上田篤氏の一連の研究もわが国における新しい広場作りへの指向を示すものといえる。

わが国の広場をめぐる研究はこのように建築学を中心とする流れが中心であり、人文科学では研究はもちろん日本の広場に対する関心すら皆無であったというのが実情であろう。最近歴史学や民俗学といった分野では空間に対する関心が非常に高まっているが、やはり広場に関する研究はみられない。その背後には、日本には広場が存在しないという無言の前提が、未検証のまま信じられてきたことがある。広場の問題はしばしば民衆自治、あるいは民主主義と関連して論じられるが、日本に広場が存在しないことは、このような政治的風土の問題とむすびつけられて取り上げられることすらあったのである。<sup>(1)</sup> たしかに日本の集落とりわけ都市においては、ヨーロッパにみられるような明確な形態の広場はきわめて少ない。しかしながら近畿地方の村落、なかでも平野部の集村においては、村落空間の中心部に小規模なものではあるが広場がみ

られ、村落生活の上でかかすことのできない役割を担っている。政治風土の問題はひとまずおくとしても、この広場の分析はわが国の文化を考える上で重要な課題である。まずわが国の村落にみられる広場の特性についてみていくこととしたい。

奈良盆地の村落は典型的な集村形態をとっており、狭い場所にギッシリと民家が立ち並ぶ景観が特色である。このような村落の多くには広場が設けられ、住民の生活にとって少なからぬ機能を果している。大和郡山市若槻は中世には興福寺大乗院領の荘園として知られ、典型的な均等名荘園として、あるいは形成プロセスの明確な環濠集落の例として有名であるが、現在の集落のほぼ中心部には小さな広場が存在する。ジュウロクセンと呼ばれるこの広場では2月2日の神年越の日の大とんどや、盆踊りなどの年中行事がおこなわれており、また広場に接しては地区共有の精米所が設けられている。この精米所の場所がかつては村の倉庫であり、近世には郷蔵のおかれていた場所であった。またこのジュウロクセンの一角はかつて札幌であったという伝承が残っている。若槻においてみられるこのような広場はこの地方にはかなり普遍的に存在し、現在でも住民にとってはコミュニケーションの場として、あるいは精米所や共同集荷場が設けられる生産の場として、またときには信仰や儀礼の場としてさまざまな機能を担っている。広場の全国的な分布についての研究はないが、たとえば沖縄県の村落においても集落の中心にウタキ、アシャゲなどと呼ばれる広場が存在することが知られている。沖縄におけるこのような空間はこれまでの多くの研究では儀礼、信仰の場として

の性格が強調されてきたが、実際に観察するとそれは奈良盆地の広場と同じく生活のさまざまな場面において機能する広場であることが明らかである。このように日本の村落においては実はかなり広範に広場が存在する可能性がある。広場の性格は地域によってさまざまな差異があろうが、これら村落の広場の多くは常設的であり、しかも広場を利用するのがその村のメンバーにほぼ限定されているという点において共通性を持っている。先に述べたように村落は都市とともに人が住む空間という意味での集落の下位概念であるが、常設的でありかつ利用が住民に限定されるという広場の性格は居住空間としての集落の性格に対応するものといえよう。とすればこのような集落住民にむけてのみ開放されているような広場を集落的広場としてとらえることが可能となる。集落的広場はまた同時に共同体的広場と表現することも可能である。

次に都市の広場について考えていきたい。都市については性格の異なる二種類の広場が存在が予想される。ひとつは村落の広場に共通性をもつ共同体的な広場（集落的広場）であり、今ひとつは都市に固有な広場のありかたである。先にのべたように都市とは「人が住む空間」（集落）と「人が集まる空間」（都会）というふたつの性格をあわせもった空間であるが、人が住む空間である以上、そこには当然のことながら地域社会が形成され、その成員が集う空間も用意されることとなる。近年の都市共同研究のなかで盛んに研究がすすめられている伝統都市における会所などは典型的な都市の共同体的広場といえることができる。例えば奈良町の場合、各町に会所と呼ばれる集会所がある。この場所で年頭には

参会と呼ばれる寄り合いが開かれるほか、町内の様々な寄り合いや行事が催されるのである。各会所にはそれぞれ神仏がまつられており、それは各町を守護する地縁的な祭祀の対象となっている。<sup>(14)</sup> 会所の存在は京都では中世末期からみられ十七世紀には一般化したものとされる。<sup>(15)</sup> 奈良でもほぼ同様のことが指摘できるだろう。<sup>(16)</sup> このような会所は都市固有のものではなく、近畿地方の多くの村落ではほぼ普遍的に存在している。村落部の会所にも内部に神仏を祭るものが多く、都市の会所と似かよった性格を持っている。<sup>(17)</sup> 村落会所も、先駆的なものは中世後期の惣村の時代に成立した祠堂に起源を持ち、近世前期に一般化したものと考えられる。<sup>(18)</sup> このような会所に代表される共同体的広場に対して都市には村落においてはまったくみられない広場の形がある。未知の人々が集い出会う空間としての広場がそれである。われわれが都市の広場として真つ先に思い浮かべるのはこのタイプの広場であろう。一時もてはやされた歩行者天国や、都市祭礼における賑わいなどをその代表としてあげておこう。このような広場は都市がもつ二面性のうち、人が集まる空間としての都会としての性格に対応するものであり、これを都会的広場と表現することが妥当と思われる。都会的広場はそこに集まる人が、不特定であるという点において特色をもっている。また多くの都会的広場は常に広場としての性格を示すのではなく、ある特定の時間を限って広場化するという特色がある。これは歩行者天国や都市祭礼を観察すれば明らかであろう。この空間の広場化をわが国における広場のひとつの特色とすることもできよう。都会的広場の特色を共同体的広場との対比で表現すると、ある

特定の時間のみ出現し、またそこに集う人は特定の集団に限定されないということになるか。

広場という用語について、これまで無定義に使用してきたが、一応小論においては「人が集まることを目的とした空間」とやや広くとらえておきたい。<sup>(19)</sup> 旧稿では、広場の範囲を屋外のものに限定していたが、本論においては屋外のものを中心とはしながらも、会所などの建築物も考察の対象としていきたいと思う。また小論でふれるのは、民衆レベルでの広場だけであるが、広場の一般的な形態、ことに歴史的な形態としては、以上述べた集落的広場や都会的広場といった大衆がみずから集う空間だけではなく、権力が自らの意志を伝達したり、権威を表現したりする権力的広場の存在が考えられる。高札場に代表される権力的広場は一見、集落的広場や都会的広場とはまったく性格を異にするもののように思われるが、広場の実際的な使われ方をみていくとこれらの境界は実に未分化である。先に取り上げた奈良町では、興福寺の南大門前に高札場がおかれていたが、この場所は奈良町でももつとも人通りが多い場所で、一揆の時には集合場所となるような性格を有していた。皇居前広場の戦後史を思い浮かべれば容易に理解できるように、わが国の広場には常にこのような二面性が指摘できるのである。この権力性をもつ広場と民衆の広場をめぐる問題については、いずれ稿を改めて論ずることとしたい。

以上のように広場と都市、村落の関係を整理した上で、以下大阪府南部における広場の分析に移りたいが、その際の分析視点として集落内の広場と神社との位置関係に注目することとしたい。日本の広場を考える

とき、神社寺院の空間をいかに考えるのかは避けては通れない問題である。本論においては広場の独自性を強く打ち出すために寺社空間をそのまま広場とみなすことはせず、区別して考えることとする。その上で広場と寺社空間、とりわけ共同体との関連が深い神社空間との位置関係に注目し、それをひとつの座標として広場と集落(村落・都市)との関係の一端を明らかにすることに努めたい。

## 二 調査地の概要

今回調査対象とした和泉地域は大阪府の南部に位置し、和歌山県に北接している。かつての国名から一般的には泉州と呼ばれている。この地域をさらに区分する方法として堺市、高石市、和泉市、忠岡町を泉北、それ以南の市町を泉南と呼ぶことが多い。人口規模では大阪第二の都市堺市が約八十万人と圧倒的に多く、他の市町では岸和田市(約十八万人)、泉佐野市(約十万人)、貝塚市(約八万人)などがこれに続いている。堺市を中心とする泉北地方には古墳時代にはわが国最大規模を誇る大山陵古墳(仁徳天皇陵)を始めとする百舌鳥古墳群が営まれ、また中世以降には国際的な貿易港でもあった自治都市堺が黄金の日々を謳歌するなど、各時代を通じてわが国でもっとも先進的な地域であった。戦後にも堺の臨海地帯にはコンビナートが築かれ、内陸の丘陵部にも泉北ニュータウンが造成されるなどその先進的な性格は変化していない。これに対して泉南地域の開発は遅れぎみで、そのためもあってかこの地域

は大阪市近郊とは思えないほど古来の生活文化を伝承する地域でもある。しかしながら、泉佐野沖合に平成六年に開港した関西空港の誕生によって、泉南の地域相は一挙に変化を遂げることとなる。

このように和泉地域は泉北、泉南のように南北に分けるのが普通であり、今日の行政区分境も基本的には東西にひかれ、市町は南北一列に配置されている。しかしながら本論では地形を重視し、この地域を山間部、平野部、海岸部に三分して、それぞれに特徴的な広場と集落のあり方をみていこうと思う。

大阪府と和歌山県の境界線をなす和泉山脈は、最高峰の岩湧山でも標高883m、それほどの高山が峰を連ねるわけでもないが、やはりそこに暮らす人々にとっては山のもつ意味は大きい。東西に連なる和泉山脈は古代から役行者の伝承に彩られた修験道の山であった。槇尾山施福寺、犬鳴山七滝宝寺などこの山脈の山々には古刹が数多い。この和泉山脈を地図で細かく眺めると府県境を構成する主峰の前面に二列の前山があることにきづく。主峰、前山の間には外通谷、内通谷が形成されている。これらの谷にひらけた小規模な盆地にはいくつかの村落が営まれてきた。内通谷に立地する村落は他の村から遠く隔たり、現在においても一見古風な生活文化を伝承している。これらの村落は非常に山深い傾斜地に立地しながらも、極限に近い場所まで水田開発がなされており、生産基盤は水田を主とし、副次的に林業や果実栽培がおこなってきた。その意味においていわゆる山村の範疇からはみだす一面を持っている。また内通谷の村落のなかには貝塚市番原や和泉市父鬼のように葛城修験の影響が



図2 調査地位位置図

強く残るものがみられる。現在にいたってもこの地域はバスの便も悪く過疎化の進行がみられるところもある。

また山間部村落のなかでも平野に近い外通谷に立地する村落には貝塚市水間、岸和田市内畑のように比較的大きな集落が営まれている。この地域は水間鉄道(水間く貝塚)に典型的にみられるように海岸部との交通が比較的発達しているほかに、国道三一〇号線のように外通谷同志の交通もよく、古くから婚姻圏などを構成してきている。

平野部に分布する村落は典型的な集村形態をとるものが多い。生業は基本的には水田稲作を基盤とし、タマネギをはじめとする野菜栽培や花卉栽培も盛んである。この地域は交通の便もよいためほとんどの農家は兼業化している。近世以来綿作地帯であったが、大正時代以降はタオル生産をはじめとする繊維工業が盛んとなり、近年では大規模な住宅開発も所々でみられる。和泉地域は和泉山脈に源を発し大阪湾に流れこむ河川が何本か流れているが、この地域の水田の用水源は基本的にはこれらの河川に依存しており、同じ川から引水する村落は水郷という村落連合を形成している。<sup>(20)</sup>この水郷はしばしば神社祭祀を共同する宮郷とも重なっている。平野部の村落にとっては谷筋ごとの村落結合はきわめて強固なものがある。このような複数村落からなる広場の形態にも注目する必要がある。

海岸部にも多くの集落が分布している。南海本線などの鉄道、あるいは国道二六号線など和泉地方の主要交通は現在この地域に集中しており、関西空港の開港はこの傾向にますます拍車をかけることと思われる。こ

のように岸部に主要交通が集まるのは古くからのことで、中世に熊野参りの人々が連なる蟻のように南をめざしたのもやはりこの地域であった。海岸部の集落はその規模を基準として三つに分類できる、第一は堺を始めとする、岸和田、貝塚、泉大津、泉佐野といった都市集落である。これらの都市群の歴史的性格は、中世自治都市の伝統を引く堺、近世城下町から発展した岸和田、浄土真宗の寺内町が母体になった貝塚、古くからの漁港から発展した泉佐野などさまざまである。これらの都市において現在商工業が発達していることはいうまでもないが、そのいずれにおいても漁港が存在していることも看過できない。次なる分類として泉南市岡田浦、阪南市尾崎、堺市大津、岬町淡輪など町場的雰囲気強い中規模の集落があげられる。これらの集落は一応漁村として位置づけることが可能だが、個々に分析してみると集落内にはさまざまな要素が共存していることにきづく。最後の分類として集落規模が小さな漁村があげられる。岬町小島、阪南市箱作などがその例としてあげられよう。これらの集落では地形的な制約もあつて漁業が生業の中心となっている。

以上早口で説明を加えてきた和泉地方の村落―都市における広場の様相を以下紹介していくこととしたい。

### 三 単独村落の広場

最初に取り上げるのは単独村落における広場の様相である。先に述べた地形的な分類に従い山間部、平野部、海岸部の展開的な村落広場の事



例を述べていきたい。

(貝塚市蓄原)

山間部村落の事例として貝塚市蓄原と岬町西畑をとりあげる。

蓄原は貝塚市を貫通して流れる近木川の最上流に位置している。<sup>(21)</sup>先に述べた和泉山脈の内通谷に立地し、周囲を山によって完全に囲まれた小盆地に集落が存在する。このような地形的制約のせいもあって、明治三年の「人員帳面」という史料によれば九四%が村内婚である。現在の戸数は八〇軒である。

蓄原は和泉葛城山の山懐に所在しているのだが、和泉葛城山は古くから葛城修験の中心的な行場として知られてきた。山頂には八大龍王社が鎮座しているが、この神社は蓄原を含む山麓五カ村によって共同祭祀される神社である。またこの和泉葛城山は和泉国の雨乞いの山でもあった。盆地中央に近木川が流れその水を利用して盆地の平坦部は水田として利用されている。<sup>(23)</sup>盆地の両側は切り立った山地となっているが、この山ぎわ部分に環状に屋敷地が続いている。集落は七つの垣内(小集落)からなり、その内近木川右岸の堂垣内に蓄原の広場であるドーノバがある。ドーノバの中心となるのは浄土宗寺院の西福寺と天神社であり、その周辺に墓地(現在は火葬墓、かつては両墓制の詣り墓)、公民館、最近できた老人会館などが集中している。その他の宗教施設として庚申塔や和泉葛城山の遥拝所もドーノバの一角にある。また現在の公民館の場所はかつて小学校であり、蓄原の主要な施設はほとんどがドーノバに集中して

いたといえる。ドーノバにおける神社、寺院など諸施設の境界は非常に不明確である。ことに神社の周囲を墓石が囲む光景は一種異様でもある。蓄原に限らず和泉地方山間部の村落では神社と寺院が空間的にも機能的にも渾然一体となった例が多い。蓄原にも西座、東座というふたつの宮座があるが、正月座と呼ばれる年頭の寄合は西福寺で営まれる。神社の祭祀ももちろんこの両座が執り行うのでこれらの座は宮座といっても寺座といっても間違いない。ただドーノバがその集合の場であることは確かである。また盆踊りなどの行事の場となるのもこのドーノバである。集落のあらゆる施設がドーノバに集中しているのであるから、行事、祭礼の空間もそこが舞台となるのは当然であろう。ドーノバはまさしく蓄原の村落空間の中心点であるといえる。

(岬町西畑)

西畑は大阪府最南端の町、岬町の山間盆地に所在する村落である。集落は西川中流の池谷と上流の佐瀬川に別れるがここでは池谷の広場について述べる。

池谷の集落は西川にそって広がる狭い盆地に立地しており、谷沿いの狭い平地を利用した水田稲作と、最近では植木栽培、椎茸栽培などが主要な生業である。山間に所在するものの、周辺の山は大半が雑木山で林業は盛んとはいえない。人家は一ヶ所に密集しており、道沿いに家が長々と続く蓄原の景観とはやや異なっている。広場は集落の中心を南北に貫く道から少し入ったところにある。この広場には特定の名称はなく単に

「公民館のバ」と呼ばれている。その名の通り狭い広場に接して公民館（集会所）と共同の精米所が建っている。また広場の西側には薬師堂がある。この薬師堂はK家が祀っている仏堂であるが、毎年五月には甘茶を供える祭りを行なっている。この広場で行なわれる最大の行事は八月十四日から十六日にかけて行なわれる盆踊りである。<sup>24</sup>西畑の盆踊りは「まかせ」と呼ばれる独特のものであるが、毎日盆踊りが始まる前に世話役のものが薬師堂を皮切りに、八幡社、弁天社などの村内の神社を提灯をもつて行列してまわり、各社に献灯するという興味深い行事が行なわれている。この時にはタイコを叩きながら行進し「まかせ」とはまた異なった唄が唄われる。先にも述べたように和泉地方山間部の村落では広場の周辺に寺院、神社が集中しているのが普通である。しかしながら西畑では男の神といわれる八幡社と、女の神である弁天社がいずれも集落の外れに所在しており、広場とは離れている。盆踊りの前のこのような行事は、盆踊りの場に神社から神霊を招くという宗教的な意味をもつものと考えられるが、空間的にいえば広場と神社が離れているがためにこのような行事が必要となったものともいえる。神社に隣接しない広場で宗教的な行事を行なう場合には、神社からの神の移動が必要であるということを知る上で重要な事例であろう。

（貝塚市三松）

平野部村落の事例としては貝塚市三松と和泉市府中をとりあげることとする。

三松は貝塚寺内町から水間寺に向う水間街道に沿った村であるが、村落形態は典型的な集村である。集落の周囲は水田がほとんどで、タマネギ生産も盛んである。またかつては再生紙を中心とする紙漉きの村としても知られていた。神社は隣村の森にある稻荷神社を付近の村落と共同でまつているため村内にはない。村組は上村と下村に別れ、その境目のところにドーノバと呼ばれる広場がある。ドーノバは集落全体の中心の位置をしめる。ドーノバに面してカイジョウと呼ばれる青年会館がある。青年会館とはいっても村落のあらゆる会合はここで行なわれる。広場の南にはダンジリ小屋があり、またかつては広場の片隅に小さな溜池があつてそこにだんじりの車輪が年中つけてあつたという。またカイジョウに接して石仏がいくつか並んでいるが、これは羅漢様と呼ばれている。ドーノバなる名称は青年会館がかつては仏堂であつた可能性を示唆するが、現在館内には神仏はなにも祀られていない。現在のドーノバは近所の人の駐車場と化した感があるが、年中行事の時には自動車はドーノバから消え、旧来の景観がよみがえる。ドーノバが村落生活のなかでもつともその機能を発揮するのは八月の盆前後であろう。ことにチャンチャンヒキという行事にはドーノバの性格が象徴的に示されていると思われ、以下この概要を紹介することとした。<sup>25</sup>

チャンチャンヒキ行事は永く伝承されてきた三松の伝統行事である。

ところが昭和三六年を最後にチャンチャンヒキはおこなわれなくなった。この行事の中心となるのはネンギンと呼ばれるその年に十八才になった男子であるが、行事の練習が受験勉強の障害になるといふいかにも現代

的な理由で行事は一旦廃止されたのである。ところが昭和六二年になって有志によって再び行事が再興された。かつての行事をささえた十八才の少年達はすでに中年の域に達していたが、かれらが中心となり保存会が結成されたため現在のチャンチャンヒキは中年の男子によって執行されている。またかつては八月一日から六日まで念仏の練習をし、七日の牛神祭から十五日までが本番であったが、現在では念仏をマスターした壮年の者が行事の主役となっているため、練習はなく、また本番も八月十四日の晩のみとなっている。

そもそも三松では十八才が村入りの年令で、正月二日に十八才に達した男子は村年寄りの家に集まって挨拶をし村入りを許された。ネンギンと呼ばれる十八才の青年達はその一年間村のあらゆる行事に奉仕する義務を与えられる。盆のチャンチャンヒキもその一環である。チャンチャンヒキの指導にあたるのは代々K家の当主と決まっており、七月三一日にネンギンはK家に太鼓を持って挨拶にいった。翌日の八月一日からいよいよ念仏の稽古が始められる。念仏は「明土行念仏」と呼ばれるもので、全員でこれをとなえるのである。太鼓とカネが使われるが、太鼓は一人が肩に担いで一人がそれを叩きながら村中をまわるのである。ルートもなかなか複雑で、稽古のときには道順の伝授も行なわれた。稽古は六日まで続けられ最終日には一人一人通して念仏を唱えられるかどうか試験があったという。各自家に帰ってから必死で稽古をしたと保存会のメンバーは口をそろえて語る。八月五日にはヤラセイと呼ばれる牛神祭りの準備が行なわれる。牛神はその名のとおり牛の神であるが、和泉

地方では八月七日（かつては旧暦七月七日）がその祭りの日である。集落の西側には近木川が流れており川にかかる橋をわたったところが牛神の祭場である。ネンギンたちはそこに土で牛を作る作業をする。八月七日の晩から毎晩チャンチャンヒキがはじめられる。まず一同はドーノバを起点に念仏をとなえながら集落をまわる。コースはドーノバから集落の中の道を北に進み、北端のアミダ山というところで引き返す。今度は別の道を通って集落を八の字にまわり水間街道に出る。水間街道に入ったところで念仏のリズムは早くなるのがきまりである。水間街道は貝塚と水間寺をつなぐ古い街道であるが、その街道を真つすぐ南に進み、隣村の水間村との村境に建つ地藏堂のところまでくるとそこでとまり念仏を三回繰り返す。再び水間街道を南に進み細い道を東に入ると山際に墓地がある。墓地中央の無縁仏を集めてある場所の前でまた念仏を五回繰り返すのである。かつてはこの墓地のあたりは人家もなく、非常に恐ろしかったという。ネンギンの人数は年によって異なるが、数が少ない年などはこの辺りでは足がすくんだと保存会の面々は語る。墓地での念仏を終えると先に来た水間街道を引き返し、ドーノバの羅漢さんの前で念仏をとなえ一日の行事を終えるのである。これを十五日まで毎日繰り返しかえたのであるが、盆の十三日から十五日はドーノバには櫓がたてられ盆踊りが行なわれる。盆踊りの準備をするのもやはりネンギンであったのでこの時にはたいへん忙しかったという。

以上が三松の盆行事チャンチャンヒキの概要である。この行事には村人の空間的な認識が象徴的に表現されている。チャンチャンヒキの出発

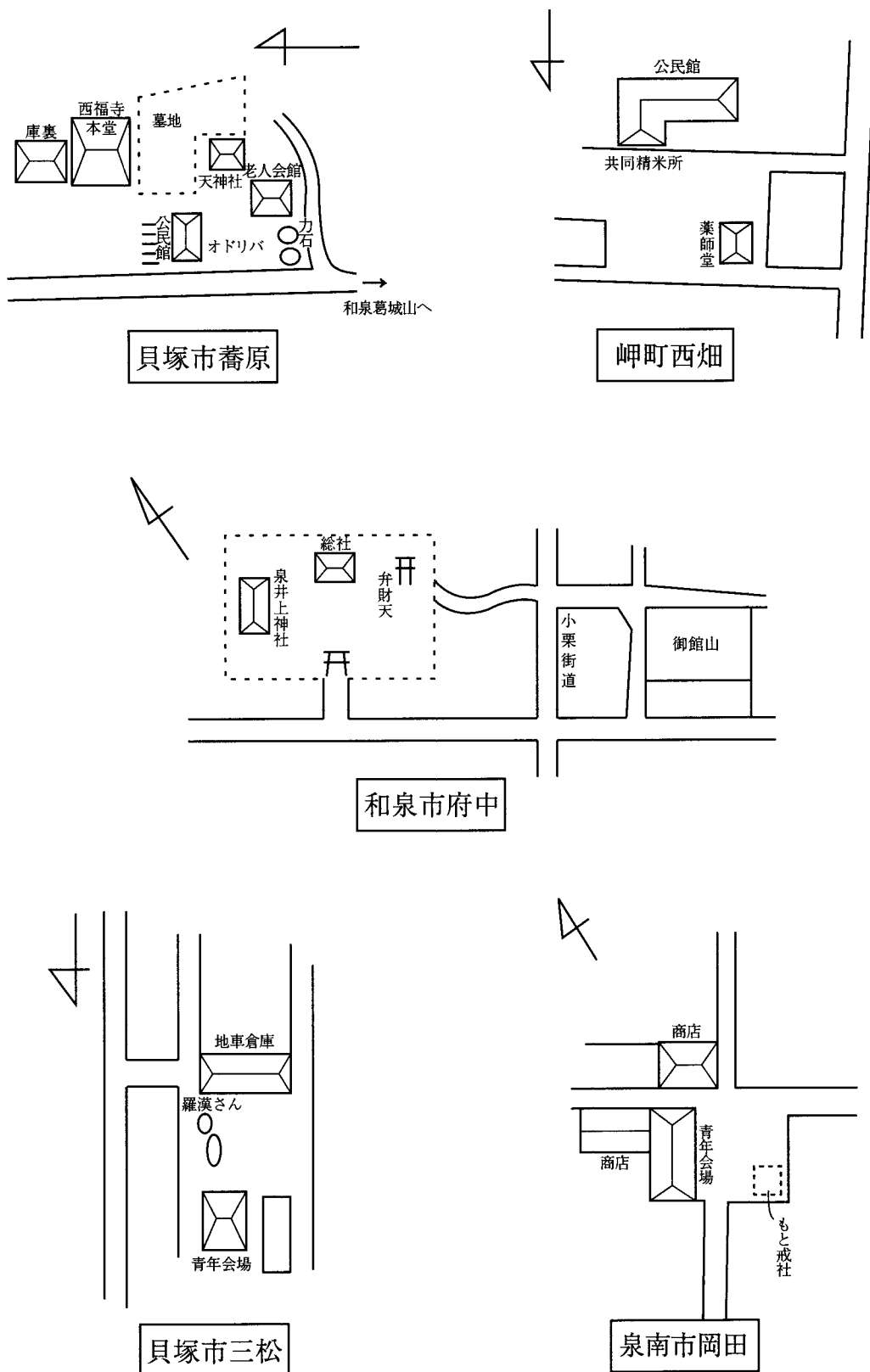


図3 村落広場の諸相

点にあたるドーノバは集落の空間的な中心であり、村落の共同生活においても中心的な役割を果たす空間である。この広場から出発し、また広場に帰ってくることは、機能的にいえばネンギン達がこの行を遂行していることを村全体にもっとも効果的に知らせる意味をもっているし、象徴的には村全体の死者供養の完結を空間的に表現することになる。三松だけではなく近畿地方平野部の集落はコンパクトな集村形態をとるものが多いが、このような村落では村の境界がより強く意識される。三松におけるアミダ山や辻堂はとくに村人に強く意識される境界空間といえる。村落空間の中心に位置する広場ドーノバから念仏行を始めアミダ山や辻堂などの境界空間を巡り、境界の外にある墓地で供養し、再びドーノバにもどってくることによって、このチャンチャンヒキの行は、広場を中心に持ち集落、水田がそのまわりを同心円的にかこむという三松の村落空間の構成に対応した、宗教的な意味世界を完結するのである。広場は象徴的にもその中心を構成するものといえよう。<sup>(26)</sup>

(和泉市府中)

府中はその名からもわかるようにかつての和泉国の国府のおかれた場所である。鎮守社は式内社の泉井上神社であるが、この名は境内の清水に由来している。そして和泉なる国名もこの清水に由来するといわれている。現在では集落のすぐ西側に「阪和線の和泉府中駅ができ、周辺は商店の集中する繁華街であり、また市役所など公共施設のならぶ地域でもある。古代以来の重要地点であったこともあり古くから交通が発達し、

現在の集落内にも南北に小栗街道が走っている。この街道は中世には熊野詣での人々で賑わった街道である。このように現在では多分に都市的要素の強い府中であるが、近世にもある程度在郷的の雰囲気を持つ集落であったらしい。泉井上神社付近の村組である市辺町（府中では村組のことを町とよんでいる。）の名はそれをよく示すものであろう。しかしまた集落の周辺には水田が広がっており、千三百石を越す村高を持つ大きな農村でもあった。景観的には完全な集村である。村全体の鎮守は泉井上神社であるが、各町にもそれぞれ神社がまつられていた。さてこの府中村の広場としてまず挙げられるのは泉井上神社の御旅所であった御館山である。この場所は神社から東の方向にクネクネと集落内を通って伸びる御幸道という道路を行くと突き当たりにある広場で、現在は公園になっている。現在では遊具のほかになにもないが相当な面積である。この場所にはかつて和泉神社という小社があったと泉井上神社では伝えており、更に古い時代には和泉国府の役所があったという伝承が残っている。<sup>(27)</sup> 和泉市教育委員会で発掘したところ建物跡などが出土している。<sup>(28)</sup>

さてこの御館山であるが、泉井上神社では相当古い時期に神幸祭は中止されており、現在の秋祭りもだんじりの曳行を中心としたものになっているが、神社でもまた地区でも御館山はかつては御旅所であったという伝承が残っている。但し、その詳細については史料もなく不明である。この御館山については天明二年にこの地域に起こった千原騒動という百姓一揆の際に結集の場となったことが注目される。<sup>(29)</sup> この年は全国的に不作であったが、泉州の一橋領五ヶ村の年貢減免の願いは領主によって

はねつけられた。激昂した農民たちは所々の山や池堤で寄合を繰り返して、ついに八月二十日府中村の御館山に屯集し、掛屋川上庄助宅をうちこわしたのである。このような一揆の際の結集の場は日常的にもさまざまな寄合、行事の場となっていたものと思われる。<sup>(30)</sup> また一揆の時に神輿が担ぎだされるといふ事例も多くあるが、<sup>(31)</sup> 和泉府中の御旅所御館山が一揆の結集の場となったことは、祭礼と一揆との深層での関連を示唆する好事例といえる。

(岬町小島)

海岸部の村落として岬町小島と泉南市岡田をとりあげた。

岬町は大阪府の最南端、和歌山県に隣接する町であるが、小島はその岬町でもっとも南の大阪最南端の村落である。和泉山脈はこの場所ので紀淡海峡につきあたっているために小島では海岸からすぐ傾斜地が始まっている。この傾斜地に扇型でピッシリと人家が密集するいかにも漁村らしい景観の村が小島である。小島ではこのような地形であるため耕地はほとんどなく住民の大半は漁業に従事していた。大阪では唯一といってよい純漁村である。大阪湾の漁業は、次に述べる岡田に代表されるように底引き網や地引き網を中心としたもので戦前までは網元制と深く結びつきながら発展してきた。しかしながら小島の漁業は個人所有の小型船による釣り漁を中心としたもので古くから網元はみられなかった。<sup>(32)</sup> 隣接する和歌山県の漁業の特色をもつ村といえよう。

小島の鎮守の住吉神社は海岸から少し階段を昇った場所に鎮座してい

る。集落の北端にあたる場所である。住吉神社の社名をみるまでもなく海の神である。この小島の広場は神社の前の浜である。現在ではこの場所コンクリートで護岸がしてあり、棧橋には多くの漁船が繫留してあるが、かつては砂浜で船は浜に乗り上げて停めてあった。村の人々はこの場所をオドリバと呼んでいる。オドリバという名はこの場所で盆踊りをするところからきている。小島の盆踊りはかつて青年団によって主催され、非常に賑わったが、近年中止されている。またオドリバは盆踊りのみならず正月十四日のトンド、盆の先祖送りなどさまざまな行事の場となっている。小島は海岸の傾斜地であるため浜を置いて他に広場を設ける余地はなかったものと考えられる。

また小島のように耕地をもたない海辺の純漁村においては、海自身が生業を担う村落空間の一部として強く認識されている。つまり平野部の村落における、水田や畑の位置を海が占めているといえる。浜は陸上へのみ目を向けた時には、村落空間の端部としてとらえられるが、海を生業空間として村落空間の中に位置づけた時にはまさしくその中心に浜が位置することに注意する必要がある。

(泉南市岡田)

岡田も海岸部に立地する村落である。<sup>(33)</sup> 現在は集落を南北に断ち割るように南海本線が走り、村内に岡田浦駅もできているため人口も増加している。また海岸部にも関西空港の前島が建設され、旧来の景観は急激に変わりつつある。今後はさらなる変化がこの漁村に訪れることが確実に

ある。村は大きく陸方と浜方に分かれる。また浜方はさらに北出、中出、西出という三つの組に分けられる。陸方、浜方という区別は単なる地域区分ではなくおのおのの生業を基準としたものである。浜方は漁業が主であり、陸方には水田、タマネギを生産の中心とした農家が集まっている。村を歩いていても陸方の民家は納屋などで屋敷の周囲を囲んだ農家風の家が多く、また浜方では舟板を壁に打ち付けた瓦葺きの民家が並ぶといったように両者の差は景観的にも顕著である。漁業は戦前までは小型船による巻き網漁と地曳き網漁が中心であったが、戦後網元制度の解体や機械船の導入などによって底引き網漁が中心となった。特にカレイは古くからの岡田の名物である。近年では海底にゴミが増えたこともあって底引き網漁はきわめて困難になりつつあり、アナゴ漁などが漁の主体になりつつある。現在では比較的近海の漁業が中心であるが、近世には盛んに関東地方への出漁がなされたことも知られている。<sup>(34)</sup> 岡田はどのように陸、浜の顕著に異なる要素を抱えた村であるため、元和四年には陸方、浦方にそれぞれ別の庄屋がおかれるようになっていた。<sup>(35)</sup> この村のもっとも東端、つまりもっとも浜から離れた場所に鎮守の里外神社が鎮座する。この神社には昭和十年頃までは宮座があり、やはり浦座（四百三十軒）と陸座（五十軒）に分かれており、浦座はさらに中、北、西の三座に分かれていた。<sup>(36)</sup> 明治以前には株座的な構成をとっていたようであるが、それ以後村座へと変化している。陸、浦のさまざまな差異はときには対立となって表面化したようである。神社祭礼をめぐることも、天保五年に若者たちが争いを起こしている。<sup>(37)</sup> 先にも記したように大正五年

に南海本線の岡田浦駅ができたこともあって、現在では大阪、堺方面に勤めに出る人も増えているが、かつては村の生業はおおよそ農業4、商業2、漁業4の割合であったという。特に注意すべきは商業の存在である。岡田の村を南北に孝子街道が走っているが、この街道沿いにかけては商家が建ち並んでいた。近世には岡田は漁港としてだけでなく、商業港としても名高く、村内の旧家赤路家に残る「商売軍談記」<sup>(38)</sup>（延享五年）には赤路家二代目の六郎兵衛が廻船問屋として全国の港を股にかけて活躍したことが描かれている。このように岡田はひとつの村でありながら、農業、商業、漁業の三要素が混在するという複雑な構成をもつ村落である。

次に岡田の広場であるエベッサンノバについて述べることにする。集落の東端にある里外神社から浜にむかつてのびる道と、孝子街道の交差点にエベッサンノバがある。位置的には集落のほぼ中心部にあたっている。今日ではその敷地の一部に青年会館がたてられているが、これも戦後のことで、かつては戎社の小さなほこらと浜方の地車小屋3棟が広場の片隅に建っていた。戎社は現在里外神社に合祀されているが、この戎社がエベッサンノバという広場の名前のもととなっている。戎神には漁業神、農業神、商業神などさまざまな性格があるが、岡田では後述するように漁師の神として住吉社があり、戎社の鎮座する場所が商家がならぶ孝子街道沿いということを考えればこれを商業神とみるのが妥当であろう。またかつてエベッサンノバにあった地車小屋も現在では神社に移されているが、今日でも十月十日の秋祭りには村の4台の地車がこの

エベッサンノバに一旦集合してから村中をかけ回ることとなっている。またエベッサンノバと関係する祭礼としては他にかつて六月三十日に行なわれていた住吉神社の祭りがある。住吉神社は漁師に信仰されている神であるが普段は里外神社の境内に祭られている。この御神体を神輿にうつし、神社から浜に向かう道を真っすぐに下がり、一旦中間点にあるエベッサンノバに安置し、付近の人々はこれに参拝する。再び神輿を担いで浜まで行き、そこに設けられた台の上の一晩置いておく。付近の人すなわち漁民はこの浜に置かれた神輿に参詣するのである。翌日は朝から再び神輿がかつがれ海に入れたりしてさんざん大暴れをしてから神輿は再び神社へと戻された。この行事は30年ほど以前に中断し、現在では里外神社境内の住吉社の前で神事が行なわれるだけである。さらに盆踊りが非常に盛んなこの地方の例にもれず岡田浦でも盆の三日間は夜を徹して盆踊りが行なわれるのだが、かつてはやはりこのエベッサンノバで盆踊りがおこなわれていた<sup>(39)</sup>という。

岡田浦の宗教施設の配置は、もつとも浜から離れた場所に里外神社があり、浜と神社の中間点にはエベッサンノバがある、また浜にも住吉神社のお旅所になるような広場的な場所があつて、この三点が一本の道によつてつながれているというきわめて直線的な構成をとっている<sup>(40)</sup>。先にも述べたように岡田は農業中心の陸方と、漁業を主とする浜方とからなる、その両者の接点である孝子街道沿いには商業地域が並ぶという複合的な構成をもっている。その異なった要素が出会う場所が広場であるエベッサンノバなのである。住吉神社の祭礼は陸方の里外神社に普段置か

れている住吉の神を、浜まで担ぎおろす祭りであるが、この時にわざわざ神輿を陸と浜の接点であるエベッサンノバに安置する。この祭礼は陸と浜という異なった要素からなる村落をひとつに融和させる役割を果たしたものと思われるが、その時に両者の接点にあたる広場エベッサンノバが一定の機能をはたしていることには重要な意味がある。この場所が商業地域であり戎神の性格が商業神であることを考えれば、陸と浜の接点にの交換の場として市が生まれるという都市の始原的な姿をそこに求めることすら可能ではないだろうか。

以上単独村落の広場を色々と眺めてきた。その共通した特色を述べる<sup>(41)</sup>と、先ず名称の点でドーノバ、オドリバ、エベッサンノバなどと語尾にバのつくものが多いことがあげられよう。バという言葉はこの地方ではほぼ普通名詞のように用いられており、少し広い場所を意味している。

これがこの地方独自の言葉なのかは今少し事例を集めて考える必要があるが、日本語の中に広場を意味する在来の言葉があるということには注意する必要がある。また広場の面積は、和泉市府中の御館山のように広いものもあるが、概ね一〇〇坪程度でそれほど広いものではない。所有は村(今日では区長の個人所有の形をとるか、財産区所有)あるいは神社である。以上の特色は奈良盆地の村落にみられる広場などとほぼ同じである。ただし広場という言葉の持つ開放的な語感とは裏腹に、我々外部の者が広場に足をふみ入れた時の感覚は非常に閉鎖的である。広場はあくまでも集落住民のためのものであり、部外者に開放されたもので



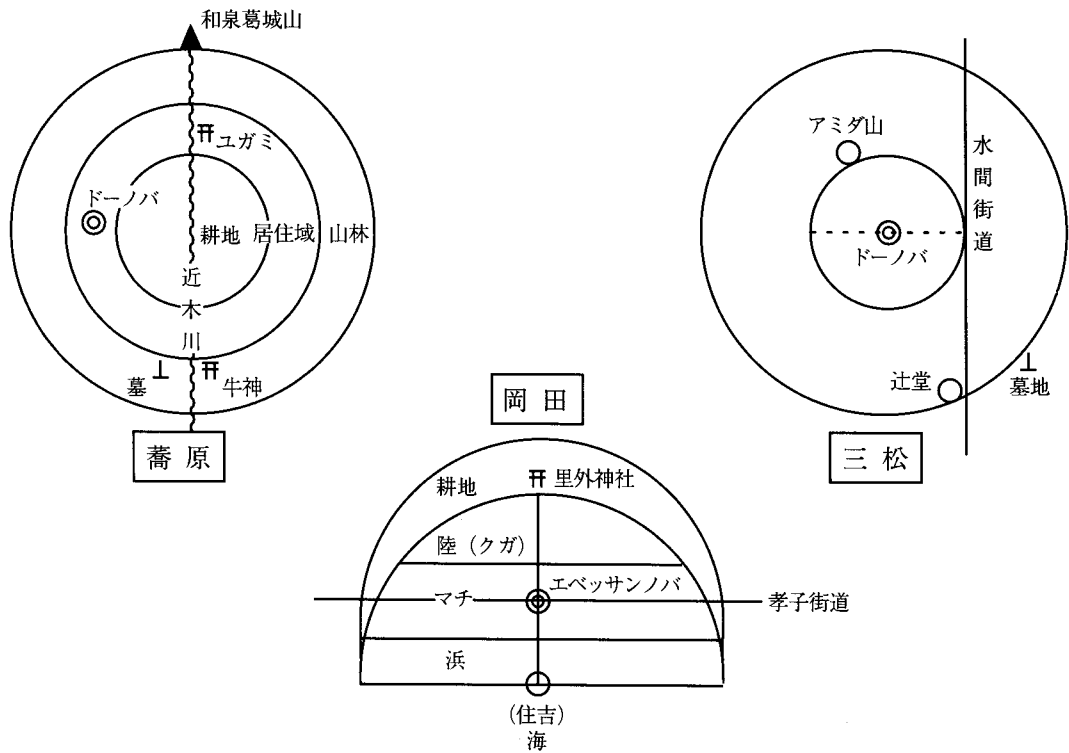


図4 村落空間の概念図

はない。さきを集落的広場と都会的広場の差についてのべたが、和泉地方の村落広場、ことに単独村落のそれは典型的な集落的広場であるといえるだろう。

以上が和泉地方の村落広場の共通した特色であるが、当然のことながら村落の立地などによって広場にもさまざまな差異が見られる。次に地域による広場の差を最初に述べたように神社との位置関係を中心に考えていきたい。山間盆地に位置する貝塚市・齋原や、背後に山がせまる海岸の村岬町・小島などでは、広場の周辺に神社、寺、その他の宗教施設、あるいは集会所などの公共施設が集中する。これは地形の制約のためこれらの施設が立地しうる空間が限定されているためであろう。また平野部村落においては集落の中心部に広場が立地する機会が多く、神社はこれとは別の場所（多くは集落の端部）に立地するのが普通である。さらに海岸部集落では、小島のように地形的な制約のあるところをのぞいては神社は海から離れた小高い場所に立地し、広場は集落の中心や浜に存在するのが一般的である。つまり山間部では広場と神社が一体化していたのに対して、海岸部にいくほど両者の距離がはなれていく傾向がみられる。このような神社と広場の位置関係の差は当然のことながら祭祀における空間構成の差となって表現されることとなる。神社と広場とが一体化しておれば、祭祀はその場所で行なわれるのであるが、たとえば泉南市・岡田のように広場であるエベッサンノバが神社から離れておれば夏の住吉神社の祭りの時には、集落中心部にある広場や浜に神幸が行なわれることとなる。この場合広場は神社の御旅所として使われることとな

ることに注意すべきであろう。つまり神社と広場の位置関係は、村落祭祀における空間構成の差異、神座が動かない祭りか、神幸をともなう祭りかということと深く関連するのである。

ここで少し広場と御旅所の関係について考えてみたい。祇園祭、天神祭をはじめとするわが国の代表的な祭礼はそのほとんどが御旅所への神幸を中心とする構成をもつものであるが、この御旅所についての研究は意外にも少ない。<sup>(42)</sup> 御旅所にはさまざまな性格のものがあると考えられるが、その中にはいわゆる広場が祭礼時に御旅所となるケースが少なからずみられるのである。お旅所が先か、広場が先かという問題は今後歴史的方法で解決していかねばならないが、ここではひとまずこういった御旅所を広場的御旅所とよんでおきたい。岡田のエベツサンノバは典型的な広場的御旅所といえるだろう。次章では単独村落においてみられた広場と御旅所、神社の関係が、祭祀集団のスケールが大きくなった時にどう変化するかを主たる関心事として、複数村落における広場のありかたをみていきたい。

#### 四 複数村落の広場

和泉地方には各村落に鎮守の神が鎮座するほか、複数の村落によって祭祀される神社があり、祭祀は二重構造化している。<sup>(43)</sup> 同じ神社を祭祀する村落の集まりを宮郷とよんでいるが、宮郷は水利を共同する水郷や共有林によって結ばれた山郷なども重なりをもつものが多い。このよう

に複数の村落によって祭られる神社の祭礼においても、御旅所的な広場が見られることがある。以下波太神社の御旅所である阪南市尾崎のエビノと信達神社の御旅所である泉南市樽井の国市場についてみていきたい。

##### (波太神社とエビノ)

波太神社は阪南市石田に鎮座する。この地の古代豪族である鳥取氏の祭祀する神として、古くは石田から東側の和泉山脈に入った桑畑に鎮座したというが、南北朝の戦乱に焼失し現在地に移ったという。<sup>(44)</sup> 波太神社の名はこの桑畑に由来する。現在の阪南市内十一集落の郷社である。<sup>(45)</sup> この神社の神幸祭は旧二月と旧六月の牛の日に行なわれていた。二月の祭りは、羽太神社から玉津浦まで神輿をおろすものであったが、早くに中止となり、現在は六月の祭りだけが十月十一日にその日をかえて引き継がれている。またこの波太神社にはかつて大宮座と呼ばれる宮座があったことが大越勝秋氏の研究によって知られている。<sup>(46)</sup> 宮座の中心となったのは鳥取郷三十六太夫とよばれる旧家でこれは祭祀圏を構成する十一ヶ村に二〜五軒ずつ散在していた。その下にほとんど村全体が加入している宮座があり、安永四年の宮座人数は計五七六人という大きな宮座であった。この宮座は明治二年ごろ廃止されている。

現在十月十日の宵祭りには各地区の櫓が宮入りをして祭りの雰囲気盛り上げている。翌日十一日が本祭りで、朝九時から神輿の渡御が始まる。現在は氏子村を八グループに分けており、それらが順番に神輿を担ぐこととなっているが、古くは各地区の代表者が担いでいた。神輿は三

台ありかつては神移しをする鳳輦を中老が、他の二台はいわゆる暴れ神輿で若者組が担ぐこととなっていた。現在でも各地区を主体としたグループ内でこのような区別はあるようである。渡御のコースは以下の通りである。神社を出発してから、鳥居をくぐり、御幸道と呼ばれる社前の道をまっすぐ海の方向へと進む。途中三本松というところで休憩をとる。この場所はその名の通りかつては三本の大きな松が生えていてその前が広場状になっていたが、今では枯れてしまつて松はない。最終的に到着するのは海岸部の大きな集落尾崎の浜にあるエビノという御旅所である。尾崎は明治七年の「一村限調帳」<sup>(47)</sup>では戸数五〇五軒という大きな村で、現在では阪南市の市役所が置かれるなどこの地域の中心として発達しつつある。漁業が中心であるが、岡田浦同様、商業、農業に従事する人も多い。エビノは尾崎のもっとも南の地区である大西に所在する。すぐ西側は浜で、昔の写真を見ると松が何本か生えていたようである。<sup>(48)</sup>

広場の東端には神輿を置く台が設けられているが、広場の中には特になにもない。このエビノのすぐ南側には尾崎の大西地区の広場である清水庵がある。こちらはエビノに比べればずいぶん狭い。広場の脇には弘法大師をまつる清水庵という小堂がある。この小堂では正月二日の恵比須講をはじめとする大西地区の行事がおこなわれる。清水庵の名は庵の横にある井戸にちなんでいる。この井戸にはかつて弘法大師が杖をさしたところからわきだしたという弘法井戸伝説があり、現在でも塩気の混じらないきれいな水がコンコンとわきだしている。また清水庵の広場の脇には恵比須、住吉、稲荷など尾崎の漁師、商人によつてまつられる小

祠も鎮座している。この清水庵の広場は尾崎大西地区の集落的広場というべきものであるが、それに接するエビノのほうは大西地区や尾崎の村では「いらいたくてもいらえない」十一ヶ村共有の広場である。秋祭りの神輿はこのエビノに十月十一日の正午ごろに到着する。到着すると一同は神輿もろとも海にはいつて潮あみをする。最近では各地区が交替で神輿をかついでいるので、尾崎以外の村が当番の年には一旦地元まで担いで帰り再度夕方エビノに帰り、そこから波太神社に還御するのである。エビノがなぜ波太神社の御旅所となつたのかを示す伝承は現在残されていない。しかしながらこの行事が全国に分布する浜降り儀礼の一つであることは確かであろう。次に述べる信達神社や住吉大社の祭礼も、原始的には浜での潮あみの儀礼であつたと考えられるがその性格は大きく変化している。尾崎の波太神社の祭礼は浜降りの原型を比較的残したものと見える。

(信達神社と国市場)

信達神社は先に述べた岡田なども含む付近十三ヶ村<sup>(49)</sup>の郷社で泉南市金熊寺(きんゆうじ)に所在している。明治以前は金熊権現社とよばれていた。信達宮郷<sup>(50)</sup>は概ね金熊寺川に沿う村々からなるが、信達神社の位置はこの川が平野部から山間部へと入っていく場所にあたっている。海岸部からは約5キロの距離がある。現在この神社には宮座はなく、また秋祭りにも渡御は行なわれていないが、明治四二年の神社合祀までおこなわれていた渡御および座の行事はその規模においてきわめて注目すべき



図5 信達宮郷と国市場

ものである。以下「樽井町史」<sup>(51)</sup>の記述に従いながら昔日の祭りの様子を見ていきたい。

旧九月十六日が本祭り、前日から各村では村内を櫓で練りまわる。当日の朝は午前九時から渡御がはじまる。神輿は三台あって、中神輿と呼ばれる主神の神輿には神武天皇の神霊が座すものとされ、また他の二つの神輿は中神輿の左右を固めるものであり、熊野、吉野の神霊が座すものとされていた。信達神社はもともとは、神武東征の時の上陸地であると伝承される泉南市樽井に鎮座し、後に山沿いの現在地に移ったとされている。後世葛城修験道と関係が生じ吉野・熊野の神をまつるようになった。そうだった伝承もあつてか、中神輿は海岸部の漁村樽井の人々が担ぐこととなっていた。他のふたつの神輿は、その他十二ヶ村から六人ずつ人が出て担いだ。行列は延々数町にも及んだという。途中牧野の御旅所で休憩し、樽井の浜に至る。この場所で潮ごりをし、行列は再び来た道に戻って浜から三キロほど離れた国市場という御旅所に到着するのである。この国市場は現在の泉南中学校の場所で、面積もほとんど中学校と同じくらいであったという。随分大きいという印象をもつが、この場所で行なわれる座の参加者の人数を知ればそれも納得がいく。国市場では神輿の渡御の後、国市座と呼ばれる宴会が催されたが、たとえば嘉永七年にはその参加者は約二千二百人という大人数であった。<sup>(52)</sup>これは各村の戸数の合計にほぼ等しく、平均一軒に一人がこの国市座に参列していたこととなる。近世の宮座としてはおそらくわが国最大規模の座寄合といつてよいだろう。国市場は広い松原で、その松を縫うようにして

紅白の幕を張り、正面に中神輿を中心に三基の神輿を置き、山手側には十三ヶ村の村役人、各村の座の長老衆が座り、また神輿の前一面にムシロを敷いて一般の座席とした。この座の世話には各村が一年交替で勤めることとなっていたが、これは当然のことながら非常に負担を当番の村に与えることとなっていた。嘉永七年の例では当番村である樽井村は九月一日から十七日まで一切の村仕事を休んだという。さすがに宴会のご馳走は各人が持参しそれを食べたようであるが、餅、酒などは当番村が用意をした。酒は四斗樽十二を要したという。結局は座の世話の大変さと、酒席における村落間の喧嘩等の理由で行事は中止されたのである。この座が終ると再び神輿を神社まで還し祭りは終了する。翌日の十七日は後宴とよばれ各村で櫓を引き回すのが普通であった。

以上述べてきた信達神社の祭りでもっとも注目すべきことは、二千人を越す人間が一同に会するという国市座のスケールの大きさであろう。本論では当然のことながらその行事の場となる国市場の広場としての性格が問題となる。この国市場という魅力的な名前をもった広場は、先にも述べたように一面の松原で、昭和にはいつてからはその中にも周辺にも、宗教施設などはみられなかったという。しかしながら近世初期にはこの広場の一角に戎山という小山があつてそこに恵比須社が祭られており、それが寛永十二年に樽井の集落内に移されたことが記録から知られる。<sup>(53)</sup>「樽井町史」には、樽井の漁師達が不漁の時に恵比須社が海から遠くはなれていることがその原因と考え、これを海に近い場所に移したという伝承を載せているが、国市場という名称から考えれば、この恵比須

社は市神であったと考えるのが妥当だろう。明治以前には国市場周辺に何軒かの商店があったこと<sup>(54)</sup>もこの恵比須社の性格を考える上で参考になる。年に一度この場所で行なわれる祭礼の時には、普段はただの松原である場所に、多くの人々が群集するのであり、その時には市立がなされたのではないだろうか。漁師が恵比須社を浜方に移したのは、そのような市の性格が近世前期には薄らいだことを意味している。

例えば、御旅所と、わが国の始源的な市とは多くの類似点が見られる。市はある場所に市神を勧請することによって市たりえる<sup>(55)</sup>のだが、それまで特別な意味をもたなかった空間が、神の勧請や遷座によって聖性を帯びた空間となり、そこに多くの人が集まるという意味で市と御旅所はほとんど類似した特性をもつ。国市場が単なる御旅所ではなくかつては市としての性格をもっていたとしても、それはさほど不思議なことではない。

信達神社の祭礼の基本的な構造は、浜において潮あみをすることであろう。この点では先にみた波太神社の祭りなどとほとんどかわるところがない。しかしながら、それであれば祭りのあとの直合も樽井浜で行なうのが自然なことのように思われる。座を少し内陸部に戻った国市場で行なうことにはいかなる意味があるのだろうか。このことを考える上で、先にみた泉南市岡田の事例が参考となろう。岡田では、集落のもつとも上にある里外神社と浜との中間点にエベッサンノバという広場が存在した。この場所は商店の集中する町場的な雰囲気のところ、広場は農村、漁村という異なった要素をもつ岡田村の融合の場でもあった。こ

れとまったく同じことが国市場にもいえるのではないだろうか。信達宮郷は山地から浜まで細長く続いており、これを構成する村落も山村、農村、漁村とさまざまな性格のものが混在している。これらの村人がたとえ年に一回といえども集い膳を囲むためにもつともふさわしい場所は、宮郷の中心部にあたる平野部をおいてなかるう。国市場はまさにその場所にあたっているのである。山と海の間点にあるこの場所は、互いの物産の交換の場としてもふさわしい。国市場がお旅所として市として定着した理由をこのように考えれば、この場所についての理解はより深まるのではなかるうか。

前章で述べたように各村落の集落的広場はあくまでもその村の人にのみ開放されたものであり、そこに集う人々はみな顔見知りであった。しかしながらエビノや国市場といった複数村落によって行なわれる祭りの御旅所に集う人々は、その数も数百人、数千人という単位であり、日常的な生活の中での接触もまれで、かならずしも顔見知りというわけではない。信達神社の神輿の渡御では樽井のみが中神輿を担ぐという特権を与えられていたため、道中他村との間に常に緊張関係があったという。ときにはこのように緊張関係をもった見知らぬ人々が一同に集い、飲食をともにしたこの国市場の祭礼に、都会的広場の萌芽をみることは決して無理ではないだろう。さらに祭礼という限定された期間の中であるが、多くの人が集うという性格を付与された国市場などの御旅所に、都市、特に都会としての都市の原型を見ることも可能だろう。都会的広場あるいは都会としての都市成立の一つの可能性として、このように多くの村

よって構成される大きな祭礼のお旅所が原型となったものがあるのではなからうか。そして国市場の例はそれがかならずしも恒常的な都市として定着しなかった例としても理解することができよう。

以上述べてきたことは、国市場なる地名の魅力にひかれて考えた仮説である。このような都市形成の形がはたして認められるかどうか、次章では堺を舞台に検証を続けたい。

## 五 都市の広場

堺はいうまでもなく今回の調査対象地和泉地方最大の都市である。本論の最初でも述べたが、都市とは人が多くすむ場所（集落）という面と人が多く集まる場所（都会）という面の両方を兼ね備えた空間である。

これに対応して、都市には集落的広場と都会的広場というふたつの性格の異なる広場が用意される。以下都市堺におけるふたつの広場の様相を歴史的に遡源しながらながめていくこととしたい。

堺の広場のうち集落的広場の代表として京都、奈良などと同じく、会所を取り上げるのが妥当であろう。<sup>(56)</sup>堺の旧市街地は第二次世界大戦末期の空襲で壊滅的な被害を受けたために、それ以前には存在していた会所は現在みられない。元禄八年の「堺手鑑」<sup>(57)</sup>という史料によれば、堺の各町にはそれぞれ会所があり、その数は百七十一軒に及んだという。この数はその後少し変動するが、近世の堺の大半の町に町会所が存在したこ

とは間違いない。堺の町会所が、他の伝統的都市の会所と同じく、住民の共同生活のセンター的機能をもっていたことは、各町の掟書のなかで町入りが、「会所入り」と表現されていることからもうかがえる。たとえば錦中浜町の承応二年の「式目帳」<sup>(58)</sup>によれば、同町では町外の者が家を買っても三年間は会所入りができず、また会所入りの時には銀子三両を町に出すこととなっていたという。このような町ごとの会所のほか、堺には惣会所が南北二ヶ所あった。<sup>(59)</sup>南の惣会所は大寺（開口神社）の境内、また北の惣会所は天神の境内というようにいずれも社寺空間の中に立地していたことには注意しておく必要があるだろう。惣会所は、各町の利害を調整する多分に政治的な機能をもっていたようであり、その誕生も中世にまでさかのぼる可能性がある。「蔗軒日録」<sup>(60)</sup>文明一八年（一四八六）の条には、次のような一文がある。

印首座今在北庄経堂、々々者地下之公界会厥也

この北庄経堂は、近世に堺北庄の惣会所があった天神の境内に建てたものと思われるが、それが15世紀にすでに会所（会厥）と呼ばれていたことは、自治都市堺の性格を考える上で重要である。また網野善彦氏はこの部分を引用して自治都市堺の無縁性を指摘されているが、<sup>(61)</sup>その前提としてまず会所や広場の無縁の場としての性格が問題とされねばならない。

次に堺の都会的広場について延べることとしたい。堺は中世以来わが国を代表する都市であり、盛り場などの都会的広場も数多く見られる。これまで泉南地方の広場のさまざまありかたを探る中で、都市を視野

に含んだ時に、広場と御旅所との間には特に密接な関係が存在することを強調してきたが、都市界の広場を考える上においてもこの視点はそのまま保ち続ける必要がある。堺における都市的賑わいと御旅所の関わりを考えれば、まず問題となるのは住吉大社の御旅所である宿院であろう。以下、宿院の変遷を通じて都会的広場の特質について考察していきたい。

宿院は堺旧市街地のほぼ中心部に位置している。現在の社地は決して広いとはいえないが、宿院の規模は後に延べるように近世以降大きく縮小しており、また第二次世界大戦の戦災およびその後の復興によって、もとの場所に大規模道路が通りその場所も若干移動している。宿院は先にも述べたように大阪市住吉区に鎮座する住吉大社のお旅所である。住吉大社の夏の大会である荒和御祓の時にはこの宿院に神輿の渡御がおこなわれる。この祭りは一般には住吉のお祓いと呼ばれ、天神祭りとならぶ大阪の代表的な夏祭である。かつては旧暦の六月晦日におこなわれていたが、現在では七月三十一日の夕方に神事が、翌日の八月一日に神輿の渡御が行なわれている。寛政六年に刊行された「住吉名勝図会」<sup>(62)</sup>にはこの祭りについて次のような記載がある。

六月晦日荒和大神輿開口に神幸す開口とハ堺の宿院なり俗に御旅所といふ六月小なれば則廿九日を用い大なれば卅日を用ゆ毎年神輿を昇ぐともがら住吉松原に來り海邊にて潮垢離を浴し神輿一基社前に出して神人社僧祝詞を修し神遷ありて社司多く騎馬にて供奉すすにて堺の御旅所にいたる初め社僧六七輩ばかり素絹を着し茶磨笠い

御輿の幸を待ちて既にして又神を宿院の假宮に遷し又祝詞を誦す夜に入れバ神輿住吉に還幸其時堺の地人船長漁師の類ひ手ごとに炬を點じ神輿を新大和橋北づめまで送る数百人のたいまつ恰も白昼のごとし是を西宮灘兵庫須磨明石の浦々南ハ泉州貝塚佐野岡田より此火をめあてとして神幸を拝するとぞ

この記事から祭りの概略を知ることができるが注意すべきことは宿院に至るまでに七堂が浜に神輿が寄ることである。この「住吉名勝図会」では住吉の松原で潮あみをする事となっており、「灘波鑑」<sup>(63)</sup>では七度(堂)の浜となっており。住吉の松原はおそらく万葉の昔叢松原と唄われた住吉大社より少し南よりの海岸部であろうし、七度の浜はそれよりさらに南の現在の大和川川口付近であろう。どちらにせよ潮あみの行事を経て、宿院への神幸がなされることに注意すべきである。この荒和御祓は、夏越のお祓いともよばれ、本来的には海岸部でのみそぎはらいを主体とするものであった。ところが近世にはすでに祭りの中心は、宿院への神幸に移っていた。この祭りに関する記録のうちもつとも古いものは「住吉大社神代記」<sup>(64)</sup>にある次のような記載である。

一、六月御解除 開口水門姫神社 在和泉監  
「住吉大社神代記」は住吉大社の神主が、神祇官に提出した解文であった内容的には住吉社の縁起である。天平三年の年記があるもののその成立年代については諸説がある。<sup>(65)</sup>ただいずれの説も平安期の成立であることでは一致している。開口水門姫神社の位置については正確にはわから



ないが、今日の宿院周辺には違いなく、この記事が六月の荒和御祓を示していることは確かであろう。歴史的にもこの祭りの原形が浜辺でのお祓いにあることが理解できる。

この祭りは堺でもっとも大きなものであり、中世、近世を通じて多くの記録に残されている。たとえば室町時代の僧季弘大叔の日記「蕉軒目録」<sup>(66)</sup> 文明十六年の六月晦日条には次のように記されている。

午後馬騎百人許、各持神討外國古兵具、送神輿而到干宿井之松原、猶如京師祇園（園） 芳・深井祭

この時期にはすでに祭りに神輿が登場している。また祇園や深草の祭りによく似ているというくぐりたりは、単なる浜辺でのお祓いから御旅所への神幸を中心とした華やかな祭礼への変化を感じさせる。しかしながら「宿井の松原」と文中にもあるように、この時期の宿院は松などが群生する林であった。祭礼の時以外の宿院は人気の少ない松原であったとみられる。

近世に入ると祭りはいよいよ華美なものへと変化する。「住吉祭礼図」<sup>(67)</sup>（四天王寺蔵、近世初期）にはこの祭りの華やかさがあますところなく描かれている。また「住吉名所図会」<sup>(68)</sup> は、その賑わいを次のように表現する。

浪花堺の町々よりハ飾桃燈旗のぼりに奇麗を尽す或ハ俄ねりものと號けて或ハうるわしく又ハ戯れたるえもいへぬさまに出立て神慮をいさめ奉る凡人泉州堺宿院より安立町新家天下茶屋今宮道頓堀にい

たり行程三里があいだ社参の人ひしと立こみて錐を立てべきところもなし

近世の宿院を具体的に知りうる史料として元禄二年に作成された「堺大絵図」<sup>(69)</sup> がある。堺大絵図には宿院の規模が東西八十四間、南北六十間と記されている。境内には南北二つの岡があり、南の岡には香取明神、北の岡には鹿島明神の祠が描かれている。その前が住吉神社の御旅所となっていて、横に飯匙堀といわれる堀が記されている。この飯匙堀は神功皇后が干珠という神珠を埋めた場所と伝えられていた。

宿院は住吉大社の御旅所として堺の人々に知られていたのは勿論であるが、その他の様々な祭礼の場所ともなっていたようである。「享保後祢記」<sup>(70)</sup> という記録には文化四年には宿院で砂持ちが七日にわたって行われたことや、天保三年に御千度がおこなわれたことが記されている。御千度の時には、「より合之大踊」が催され、群集が宿院をふりだしに堺の町を練り歩いたという。このように近世の宿院は住吉の祭礼の時だけでなく、ことあるごとに堺の人々が集う祝祭空間であった。まさしく宿院は堺における代表的な都会的広場であったといえよう。

明治以降、広い宿院の境内にはじよじよに商店がたちはじめ、それまでは祭礼の時だけであった宿院の賑わいは日常的なものとなっていく。現在の堺市内の盛り場は南海電鉄の堺東駅前に移動しているが、戦前までの宿院は堺唯一の盛り場、繁華街であった。「大阪府全志」<sup>(71)</sup> は次のように記す

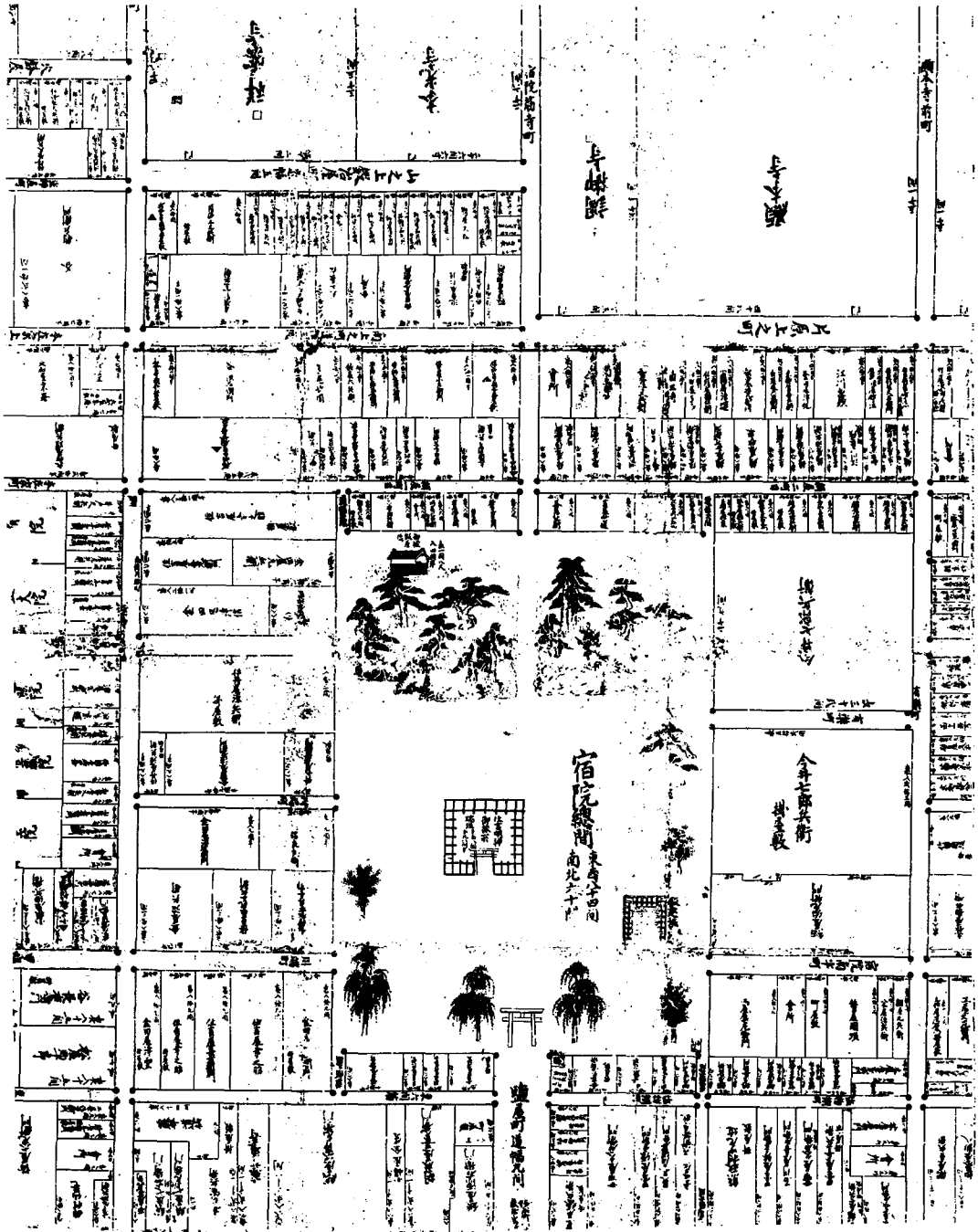


図6 『元禄二年堺大絵図』（国立歴史民俗博物館蔵）に描かれた宿院

往時より住吉神社の御旅所たりしと、他の好位置なるとを以て当市繁栄の中心となり、付近には寄席あり、劇場あり、其の他の諸興業及び料理屋飲食店を初め、凡百の肆店皆此に集りて殷賑雑鬧の巷を為せり

「大阪府全志」にもあるように、かつての宿院境内には卯の日座や電気館といった映画館や、旭座などの演芸場がならび、道にも様々な大道芸人が出ていたという。<sup>(72)</sup> また付近には青物市場や魚市場もあり、南大阪の百姓や漁師にとつてもそこは貴重な交易の場であった。宿院の境内は、大正四年に大正天皇即位記念に公園として整備されたが、公園内でも様々な香具師が口上を競っていた。まさしく宿院は、多くの人を集めるキラキラした魅力を持つ空間であった。

しかしながら第二次世界大戦における大空襲は、堺旧市街地の大半を焼き尽くし、宿院周辺も大きな被害をうけた。戦後の復興によつてもとの宿院境内の場所に大通りが通ることとなり、宿院は若干その位置を移動している。宿院周辺には数件の映画館が残るだけであつての賑わいは今はなく、堺の盛り場は堺東駅前にもその場を移している。御旅所から駅前へとという盛り場の移動もまた時代を反映したものとといえるのかもしれない。

宿院の変遷は、都市の広場あるいは都市そのものの発生を考える上で非常に示唆に富んでいる。宿院がなぜ住吉大社の御旅所となつたのかはよくわからないが、<sup>(73)</sup> 古代の宿院付近がみそぎをするにふさわしい静かで

清らかな浜辺であつたことは間違いがないだろう。しかしそこが神幸の場となり、年に一度とはいえ多くの人が集まるようになると、その場所は自然と都会的広場の様相を示し、やがて常に人が集まる盛り場へと成長していくのである。人が集まる場所には、当然のことながら人をひきつける魅力があるはずであるが、宿院の場合のそれは御旅所における祭礼であつた。神の来臨が、都会的魅力の源となつていたのである。堺宿院の事例は御旅所をわが国における広場の一つの形として認める根拠となるものだろう。

### まとめ

これまで和泉地方の村落、都市の広場の事例を紹介し、その中で集落的広場、都会的広場の区分や、都会的広場と御旅所との関係に触れてきた。本論では都会的広場の一つの原型として御旅所を取り上げている。御旅所とは本来なにもない場所に祭礼時だけ多くの人が集まるものである。このような御旅所の性格は、時間を限つて広場化する現在の歩行者天国などの都会的広場の姿を彷彿とさせ、また始原的な都市の姿に通じるものがある。小論で取り上げた事例に即していえば、岡田では、漁業、農業、そして商業と村落内で異なつた要素がみられたが、祭祀を通じてこれらの融合をはかる場として御旅所であるエベッサンノバが存在した。また国市場の例では祭祀集団を構成する人数が多く、それを統合する場としての御旅所の性格がみられた。つまりお互いが顔見知りであるよう

な小さな集団では集落的広場だけが必要であったが、集団の規模が大きくなり、その内部の構成も均一ではなくなった時には、その融合を図るために御旅所が利用されるようになったということが僅かの事例ではあるが想定されるのである。それが都会的広場あるいは都市そのものの萌芽となった可能性も否定はできない。常設的ではなく時間を限って広場化するというわが国の都会的な広場の源流に、御旅所空間を想定することができよう。

以上は、日常的には特に意味をもたない場所が祭礼時などの時に広場化するケースを念頭においた議論であるが、このようなケースの他に普段は集落的広場である場所が、祭礼など特定の期間だけ共同体のメンバー以外にも開放され、都会的広場としての色彩を帯びるといった場合が存在する。京都祇園祭の宵山の時には、各鉾町の町会所(町家とよばれる)にはその町が古くから所有する宝物類が飾られ、見物人は建物の中に入ってそれをまじかに見ることができ、町会所は日常的にはその町の構成メンバー以外はずり利用しない場所であるが、これなどは集落的広場から都会的広場への転化としてみることができよう。また小論で取り上げた堺の宿院にも近世には会所が存在し、現在でも地域の集会所が建っている。しかしながら祭礼の時には、そのような地域の人々の広場といったのんびりとした雰囲気は一掃され、不特定多数の大衆が集い出会う都会的広場に装いを変えるのである。このように祭礼などの時に、集落的広場から都会的広場への転化が行なわれることを都市の広場の特色のひとつとすることができよう。

本論ではそれぞれの広場の歴史的な考察や泉佐野、岸和田、貝塚など堺とは異なった性格をもつ都市の広場の考察など十分明らかにできなかった問題点も多い。今後はこれらの点を解決することによって和泉という特定地域における広場の特性をより明確にするとともに、各地の広場との比較の中で和泉地方の広場を相対化する努力を続け、より魅力的な広場論を模索していきたいと思う。

註

- (1) かいわい、盛り場などの概念については次のものが詳しい  
 材野博司『かいわい』鹿島出版社 一九七八  
 服部銈一郎『盛り場―人間欲望の原点―』鹿島出版社 一九八一
- (2) 都市デザイン研究体(伊藤ていじ他十一人)『日本の広場』(建築文化)八一  
 九七一
- (3) 渡辺達三『原始時代の広場』(造園雑誌)三三二―一九七〇  
 渡辺達三『古代の広場』(造園雑誌)三三三―一九七〇  
 渡辺達三『中世集落的広場』(造園雑誌)三三四―一九七二  
 渡辺達三『近世広場の諸形態』(造園雑誌)三五三―一九七二  
 渡辺達三『鎮守の杜の成立と展開』(造園雑誌)三五四―一九七二  
 渡辺達三『火除地広場の成立と展開(1)』(造園雑誌)三六二―一九七二  
 渡辺達三『火除地広場の成立と展開(2)』(造園雑誌)三六四―一九七三  
 渡辺達三『百姓一揆と広場(1)』(造園雑誌)三六一―一九七三  
 渡辺達三『百姓一揆と広場(2)』(造園雑誌)三七二―一九七三  
 渡辺達三『近世集落的広場(1)』(造園雑誌)三七二―一九七三  
 渡辺達三『近世集落的広場(2)』(造園雑誌)三七三―一九七三  
 渡辺達三『広場の歴史的諸形態』(造園雑誌)四三一―一九七九
- (4) 三浦金作『広場の空間構成』鹿島出版会 一九九三
- (5) 加藤晃規『日本の広場のある街 ミドリ・ミツ・ツチ』プロセスアーキテクチュア 一九九三
- (6) 上田篤『都市の実験』文藝春秋 一九八四

- (7) 羽仁進『都市の論理』勁草書房 一九六八
- (8) 拙稿「奈良盆地における広場について」『日本民俗学』一七三 一九八八
- (9) 渡辺澄夫「畿内庄園の基礎構造」吉川弘文館 一九五六
- (10) 渡辺澄夫「環濠集落の形成と郷村制の関係」『史学研究』五〇 一九五二
- (11) 沖繩の宗教空間についての研究はきわめて多い。本稿との関係では以下のものが注目される。
- 仲松弥秀『神と村』伝統と現代社 一九七五
- 村武精一『祭祀空間の構造』東京大学出版会 一九八四
- (12) 近世会所の研究は主として京都を中心に進められている。
- 谷直樹「町の発展と町会所の成立」(祇園祭山鉾町会所建築の調査報告) 京都大学工学部建築学教室建築史研究室 一九七五、菅原憲二「近世京都の町と用人」(高橋康夫、吉田伸之編『日本都市史入門Ⅲ』所収 東京大学出版 一九九〇)、杉森哲也「町組と町」(高橋康夫、吉田伸之編『日本都市史入門Ⅱ』所収 東京大学出版 一九九〇) など
- (13) 奈良町の会所に関する研究としては以下のものがある。
- 川上貢「近世における町と村の会所」(『日本建築学会大会学術講演梗概集』一九七四)、岩井宏寛「町の共同体と奈良町会所」(『国立歴史民俗博物館研究報告』三三 一九九二)、拙稿「近世奈良町の会所」(『史朋』二七 一九九二)
- (14) たとえば井上町の会所では蔵主権現、八王子が、餅飯殿町の会所では弁財天がまつられていた。拙稿「近世奈良町の会所」(『史朋』二七 一九九二)
- (15) 谷直樹「町の発展と町会所の成立」(祇園祭山鉾町会所建築の調査報告) 京都大学工学部建築学教室建築史研究室 一九七五、菅原憲二「近世京都の町と用人」(高橋康夫、吉田伸之編『日本都市史入門Ⅲ』所収 東京大学出版 一九九〇) などに詳しい。
- (16) 奈良町では明暦三年に毎月町ごとに寄合を開くことを義務づけた触れが出されている。拙稿「近世奈良町の会所」(『史朋』二七 一九九二)
- (17) 原田敏明「会所と部落の宗教」(『社会と伝承』一一二 一九五六)
- (18) 奈良県下の村落会所についてはかつて論じたことがある。
- 拙稿「奈良盆地における広場について」(『日本民俗学』一七三 一九八八) また滋賀県八日市市では村堂の歴史が中世にまでさかのぼることが明らかにされている。
- 「八日市市史 第二巻」八日市市役所 一九八四 当該部分の執筆者は伊藤唯真
- (19) 旧稿では広場を次のように定義づけている。「自由に出入りができ、所有者が公共であり、また人が集まることを目的として作られたオープンスペース」
- 拙稿「奈良盆地における広場について」(『日本民俗学』一七三 一九八八)
- (20) 大越勝秋「和泉地方における重要井堰と湧水帯」(『歴史地理学紀要』二二)
- (21) 貝塚市蓄原については一九八七年以来摂河泉地域史研究会之メンバーの一員として民俗調査を続けている。その成果は近く同会より刊行される予定である
- (22) 蓄原区有文書
- この史料の整理はともに蓄原の調査に参加した森本一彦氏の手によっている
- (23) 蓄原には合計7箇所の井堰が近木川に設けられている。井堰はユとよばれ、もとも上流のイチノユの近くには水神であるユガミがまつられていた。
- (24) 西畑の盆踊りをはじめ和泉地域の盆踊りについては次のものが詳しい。
- 泉州の祭りと民謡を記録する会「泉南地域の盆おどり」一九九二
- (25) チャンチャンヒキの調査については貝塚市教育委員会の前田浩一氏、近藤孝敬氏のお世話になった。
- (26) 広場が村落空間のなかでしめる象徴的な役割についてはかつて奈良県天理市乙木の事例を中心に検討したことがある。
- 拙稿「天理市乙木の祭祀と村落空間」(『近畿民俗』一〇九 一九八六)
- (27) 「和泉市史第一巻」和泉市役所 一九六五 執筆者は三浦圭一
- (28) 御館山にたつ和泉市教育委員会作成の説明板による
- (29) 千原騒動については多くの研究がある
- 「和泉市史第二巻」和泉市役所 一九六五 執筆者は三浦圭一
- 児山祐一良「天明の義挙 千原騒動」文理閣 一九七八
- 盛田嘉徳、岡本良一、森杉夫「ある被差別部落の歴史」岩波書店 一九七九など
- (30) 一揆における結果の問題については一九九三年度の日本民俗学会大会において大和の事例を中心に報告した。その内容については次のものにまとめた。
- 拙稿「一揆における結果の場」(黒田一充編『聖域の伝統文化』関西大学出版 一九九四 所収)
- (31) たとえば明和8年の常陸久慈郡の一揆など
- (32) 岬町小島の調査は「岬町の歴史」編纂にともなうもので増崎勝敏との共同調査である。漁業関係については増崎氏のご教示による

- (33) 泉南市岡田の調査は泉南市教育委員会から委託されて摂河泉地域史研究会がおこなっている。調査は民俗と方言を対象として行なったが私はこのうち民俗の部分を担当している。調査の全容については以下の報告書を参照  
 『泉南市岡田地区民俗資料調査報告』泉南市教育委員会 一九九一
- (34) 『泉南市史本文編』泉南市役所
- (35) 『岡田村浦陸縫に付陸方より難書』(『泉南市史史料編』泉南市／一九八二所収)
- (36) 大越勝秋「泉州信達郷の宮座」(『近畿民俗』一七 一九五五)
- (37) 『岡田浦陸喧嘩一件』(『泉南市史史料編』泉南市／一九八二所収)
- (38) 『泉南市史本文編』泉南市役所
- (39) 岡田の盆踊りはサンヤといわれる独特のものであった。
- (40) 全国的に海岸部の村落ではこのような空間構成をとるものが多い。次の文献には多くの事例が載せられている。  
 明治大学工学部建築学科神代研究室編「日本のコミュニティ」(SD)別冊7 一九七五)
- (41) 奈良盆地では和泉地域におけるバのように広場をしめす固定的な語彙は特にみられなかった。しかしいくつかの広場でカドという言葉が使われていた  
 拙稿「奈良盆地における広場について」(『日本民俗学』一七三 一九八八)
- (42) 垂水稔「結界の構造」名著出版 一九九〇 が祇園祭りの御旅所についてとりあげている。
- (43) 大越勝秋氏は一連の宮座研究のなかで繰り返しこのことを述べておられる。集中的に宮郷の問題を取り上げたものとしては以下のものがある。  
 大越勝秋「和泉の宮郷の分布と成立」(『人文地理』一四一六 一九六二)
- (44) 『東鳥取村誌』東鳥取村 一九五八
- (45) 尾崎、新町、波有手、黒田、下出、石田、自然田、中、桑畑、山中、貝掛、
- (46) 大越勝秋「泉州鳥取郷の宮座、寺座」(『近畿民俗』一五 一九五四)
- (47) 『阪南町史下巻』阪南町役場 一九七七 所収
- (48) 『東鳥取村誌』東鳥取村 一九五八
- (49) 樽井、岡田浦、岡田(岡田の浦方と陸方を区別している)、北野、中小路、馬場、幡代、牧野、岡中、市場、大苗代、六尾、金熊寺
- (50) この地区の村落は共有山を持ち山郷を形成しているが、信達山郷は宮郷にさらに葛畑、楠畑、童子畑の3地区が加わって構成されている。
- (51) 『樽井町史』樽井町役場 一九五五
- (52) 大越勝秋「泉州鳥取郷の宮座、寺座」(『近畿民俗』一五 一九五四)
- (53) 「貞享二年寺社之覚」(『樽井町史』樽井町役場 一九五五 所収)
- (54) 『樽井町史』樽井町役場 一九五五
- (55) 市神については多くの研究がある  
 長井政太郎「山形県の市の研究」一九四二  
 北見俊夫「市と行商の民俗」岩崎美術社 一九七〇 など
- (56) 堺の広場については渡辺達三氏の先駆的な研究があり、その中で会所について述べられている。  
 渡辺達三「近世集落の広場 堺のケーススタディ(1)」(『造園雑誌』三七一一 一九七三)  
 渡辺達三「近世集落の広場 堺のケーススタディ(2)」(『造園雑誌』三七一一 一九七三)
- (57) 『堺市史』第5巻 堺市役所 一九三〇 所収
- (58) 『堺市史』第5巻 堺市役所 一九三〇 所収
- (59) 『堺手鑑』(『堺市史』第5巻 堺市役所 一九三〇 所収)
- (60) 東京大学史料編纂所編纂『大日本古文書 蕪軒日録』岩波書店 一九五三
- (61) 網野善彦「無縁・公界・楽」平凡社 一九七八
- (62) 『住吉名勝図会』国書刊行会 一九八七 所収 原本は寛政六年刊行
- (63) 『灘波鑑』(『浪速叢書』十二巻所収)
- (64) 田中卓「住吉大社史上巻」住吉大社 一九六三 所収
- (65) 田中卓「住吉大社史上巻」住吉大社 一九六三
- (66) 西宮一民「仮名遣を通して見たる住吉大社神代記」(『萬葉』六三 一九六七) 坂本太郎「住吉大社神代について」(『国史学』八九 一九七二) 西本泰「住吉大社」学生社 一九七七 など
- (67) 東京大学史料編纂所編纂『大日本古文書 蕪軒日録』岩波書店 一九五三  
 堺市博物館蔵のものもある
- (68) 『住吉名所図会』国書刊行会 一九八七
- (69) 国立歴史民俗博物館蔵、ただし本稿では次の刊本によった  
 『元禄二己巳歳堺大絵図』前田書店 一九七七
- (70) 大谷女子大学資料館編『堺周辺村落史料』一九九二 所収

- (71) 井上正雄『大阪府全志巻五』一九二二
- (72) 松本壮吉『堺』堺民俗研究会 一九五五
- (73) 近世以来神功皇后伝承と関連して住吉社がもとは堺にあったという伝承があるが、その真偽は不明である。

- (74) 祇園鉾町の会所建築については次のものが詳しい  
『祇園祭山鉾町会所建築の調査報告』京都大学工学部建築学教室建築史研究室  
一九七五

(大阪狭山市教育委員会)

## Village Hiroba, City Hiroba

ICHIKAWA Hideyuki

Until now, little research has been done on the subject of hiroba (public spaces) in Japanese villages and cities ; indeed, the very existence of hiroba has been almost entirely overlooked by scholars. Nonetheless, forms of hiroba, though small in area, have been a constant feature of the Japanese village and play a vital role in the functioning of the village community. In cities, there are two main types of hiroba : small-scale meeting places maintained for gatherings of local residents, and places in which people of any origin or orientation may gather. Through a consideration of hiroba in the Izumi region of southern Osaka prefecture, the present study attempts to elucidate the correlation between the local-community type of hiroba seen in both villages and cities and the open, general-public variety typical in urban areas.

Within the selected region, typical local-community hiroba can be seen both in the farming villages of the flat-lands and mountains and in the fishing villages along the coast. In configuration, all these villages are typical examples of Japanese village form, demarcated by a clear boundary and displaying a highly centripetal layout. At the hub of this configuration is the hiroba.

The region studied is also where the *go-miyaza*, a group presiding over religious festivals observed by two or more villages, were well developed. Accordingly, the *otabidokoro*, temporary lodgings during the festivals, play an important role as community hiroba. The *otabidokoro* are normally just vacant areas of land, but during the festival are filled with throngs of revelers. These sites of religious observance involving more than one village point to the origins of urban hiroba and even of cities themselves.

The study also looks at *shukuin* (lodgings) in the coastal city of Sakai, a typical urban hiroba. Originally, the *shukuin* was the *otabidokoro* for pilgrims to the Sumiyoshi Shrine. It changed in nature with the passage of time. In ancient times, it was a place of purity used for seaside ablution ceremonies. Gradually, however, the ceremony itself became a festive occasion. The rites at the *otabidokoro* made the spot a popular gathering place and eventually a permanently bustling hub of activity. This process represents the typical relationship between hiroba and urban festivals and religious events.